

つながりの扉

真つ赤な火柱に囲まれている。アートのウナは頬に切り裂かれんばかりの熱を感じた。汗さえも蒸発し、皮膚にあるのは痛みだけだ。逃げ道を探すが、どこにもない。ノウアは容赦なく弟子を火あぶりにするつもりのようなのだ。

「術を唱えろ！」

師の声が聞こえる。アートのウナは歯ぎしりした。指示に従いたくはないが、命に関わりそうだった。そうでもしなければアートのウナが本気をださないだろうと、ノウアはわかっているのだろう。

髪の毛が焦げる匂いがある。アートのウナは、普段は使わない舌の筋肉を動かした。口や喉も、特別な音が必要とする実言葉アウシエヌムンのために伸縮する。

《インボーデイガ（消火）！》

少しくぐもった、捻じれのあるその言葉は、火柱の勢いを変えた。赤き炎は、ひゅうひゅうと悲鳴を上げ、天高く伸び、細く細く、薄くなっていた。

魔導師の木が、薄紫になった夕空を背にそびえている。熱くなった肌に暮れの風が触れた瞬間、アートのウナは空気を思い切り吸い込んだ。ぴりつとした冷気が肺を刺し、思わず咳き込む。足が疲労で震えている。彼女は倒れまいと、膝を掴んで喘いだ。こめかみから落ちる赤毛に、汗の雫がつかまっている。

「悪くない。短期間でここまでできれば上出来だね。次は、こんな蠟燭の火ではなく、山火事くらいは消せるようにしよう」

魔導師の木の根元で胡坐を掻くノウアが言った。傍には、アートのウナの使い魔のエラドルスが四肢を警戒で広げて立っている。彼は、主人が炎の檻から生

還するのを確認すると、勝ち誇ったように「ギャーギャー」叫んで、ノウアの前を駆けまわった。

「……蠟燭？ 噴火の間違い、でしょ」アトウナは、小さく悪態をついた。

「言葉の反撃もできる、大変よろしい。だが、これは冗談で言っているのではないよ、アトウナ。あらゆる状況を踏まえ、相応に術を進化させ、再編する。これが魔導師の基本だ。山火事くらいどうってことないという気持ちではないと、いざ何かあった時にすべての力を発揮できないよ。……さ、もう一度」

ノウアは、人差し指を上に向けて円を描くと、《アッシェンドウラ》と呟き、アトウナに向けて放った。轟音と共に、アトウナは、また炎の檻に閉じ込められた。

〈見えない死〉の解決を早急にと女王から命を受け、下級魔法動物被害の仕事が薬の人に流れて大幅に減ると、ノウアは、空いた時間にねじ込むようにして、アトウナの魔法指導をするようになった。彼女の能力向上が〈見えない死〉の解決に繋がるとでも言わんばかりに、ノウアは今まで以上に厳しく指導した。

しかしアトウナは、自分が強くなりたいとは微塵も思っていなかった。期待されるのはまっぴらごめんだ。崇拜、嫌悪、その手の中で転がされているようなノウアやアリアが、哀れでならない。あんな風になるものか。焦りというらだちで張り詰めた魔導師の木は、居心地が悪かった。

だから、ノウアが留守のときなど、アトウナは、これ幸いと、自室で『魔導師のウソ・ホント集』というくだらない本を読んで過ごした。師が戻ってくると、それは寝台の下に隠され、「〈見えない死〉の呪いは深刻ですよね」という陰しい仮面がつけられた。ノウアは隠されたものについて言及しなかった。なぜなら、そんな余裕はどこにもなかったからだ。

ノウアが言う蝋燭をあと三回ほど消すと、夕飯のために居間へ引き上げた。

「食事が済んだら、地下室に行くからね」

魔力を使い、絞られたような鈍い痛みを体中に感じながら、アトウナはルードルの照り焼きを食べようとしていた。だが、師の言葉を聞いて、うっかり落としそうになった。

「地下室があるの？」

「そうだよ。用があるときにしか開けないけど。ほれ、口に食べかすがついてる」ノウアは顎をつついて教えた。

アトウナは口を拭い、横から主人の肉を奪おうとするエラドルスの鼻づらを掴んでのけた。竜は喚きちらし、主人が油断した隙にルードルの照り焼きを二つほど失敬した。

「今まで十三年ここで過ごしてきたけど、地下室があつたなんて知らなかった」

アトウナは、使い魔を横目で睨みながら言った。その様子を、天井の止まり木にいる鳥人形のストロキントが、面白そうに見下ろす。

「簡単に教えられる場所じゃないんだよ。言っておくが、これは極秘だからね。あたし以外の誰にも、地下室に行くことを言うんじゃないよ？」ノウアは、ほとんど食事台を指で叩いた。

「うん、分かってる」

アトウナはもぐもぐしながら頷いた。ノウアは、じっと弟子を見つめる。

「さらっと言うんじゃないよ、おちびさん。あたし以外に言うなって言ったんだ。その意味が、分かるかね？」

しばし二人は、互いの紫の目を見つめ合った。

「……ええと、それって……。ほんとにそう？　もしかして、アリアには話すなつてこと？」

ノウアは、「そうだ」と頷いた。

「どうして？」

「いいか、生きている者には、それぞれ役割がある。それは、互いにいじくつて掻き乱しちゃいけないんだ。自分の役割に集中できなくなるからね。だから、領域は守らなくてはならないんだよ」

言うなり、ノウアは立ち上がった。それから思い出して振り返った。「ああ、使い魔は連れていけないからね。ここに置いておくんだよ」

「え、なんでよ！」

「入れないよう、まじないがかかっているからだ。……ストロキント、暴れん坊竜を見張っておいてくれ」

師は、天井の鳥人形に向かって言うと、さっさと居間から出ていった。

アトウナは、師の言っていることがどれも理解できなかったが、置いていかれまいと、急いで夕食を済ませた。

地下へ行くと言ったにも関わらず、ノウアは三階にある『なんもなし部屋』という部屋へ向かった。

『なんもなし部屋』へは、一度、小さな頃に入ったことがあった。一脚の椅子が真ん中に置いてあるだけの、窓も絵画ない無味乾燥な部屋だ。

だがそのつくりの理由は、まもなくわかった。真ん中の椅子は、座るための

ものではなく、天井のためにあったのだ。そう、そこには、一枚の扉があった。気にもならないほど寂れて、鼻で笑うくらいの用途しかなさそうな扉が。だが、その扉こそ地下室への入り口なのだ、師は言った。

「どうして『なんもなし部屋』を通過して地下へ行くの？ 扉が天井にあるだなんて、おかしくない？ あそこから地下まで滑り台で降りるの？」

「そんなめんどっちなことするわけないだろう。空間を細工してあるんだ。だから天井から行っても、地下に続くわけ。先代たちの知恵なのさ。……ま、見ている」

師は、よいこらと椅子に立つと、こう唱えた。

《シャーエレ（浮かべ）》

師の体が、突然重さを失ったかのように、宙に浮かびはじめた。灰色の髪も、くたびれた貫頭衣も、水中にいるように揺らいでいる。ノウアは、天井と平行になるよう体勢を整えると、扉に向かってゆつくりと歩きはじめた。

「さ、やっごらん。集中するんだよ、失敗したら床に落ちるから」扉を開けて中に入ったノウアは、床にいるアトウナに言った。

アトウナは、気が乗らなかったが、息を吐き、肩の力を抜いて、アウンエヌムン実言葉の発音に集中した。

《シャーエレ》

とたん、地面とつないでいた糸が切れたように、体が持ち上がった。足の裏が地を探し、一瞬恐怖が沸き起こる。ノウアの視線を感じる。平静を装い、扉と平行になろうと、足を壁に向ける。瞬間、体勢を崩し、くるんと後ろにひっくり返った。「いやあ！」

「真面目にやっておくれ、おちびさん」

「大真面目よ！ でも、地面がないんだよ！」

アートウナは、手足をばたつかせた。体はころころ空中で回転する。

(最悪、とんだ見ものよ)

「アートウナ、じゃあ、手足をかいてごらん、泳ぐみたいにさ。暴れるんじゃないぞ。落ち着いて、自信をもってやれ。こっちに來ることだけを考えるんだ」  
宙で回転し続けるのを、アートウナは、じつとしていることなんか止めると、ノウアに言われたように、今度は両手で空気をかき分けるようにして、恐る恐る前進した。

手も足も使いながら、ようやく扉へたどり着くと、ノウアは、アートウナを引っ張り上げた。

「魔力のない者はここへは來れないのさ。ま、未熟な者もそうだが……。ここから先には、守らなくてはいけないものがたくさんあってね。だから、わざわざこういう仕組みにしたんだよ。これは、アケラスの考えさ」

「……一番……最初の魔導師？」アートウナは、なんとか足の震えをおさえようとしたりした。

「そう」

「こんなことする必要があるくらい、大切なものがあるわけ？」

後ろを振り返ると、椅子が、床ではなく壁にくっついていっているような、何とも気味の悪い光景が広がっていた。

ノウアはアートウナの問いには答えず、さつさと先へ進んでいった。アートウナは、慌てて追いかけた。

自分の拳に向かって、師は実言葉アウシエヌムをかけた。その手を開いたとたん、光の小鳥が飛び立っていくのを、アートウナは瞬きせず見つめた。小鳥は揺らめく炎のように、尾羽から明るい線を引きいて飛んでいく。鳥が通ると、地下通路の様子子が浮かび上がった。

床は地面が剥き出しで、ところどころ木の根っこが突き出ている。やはり、ここは地面の下であるようだ。

しばらく進むと、翠玉色すいぎょくの両開き扉に行きついた。扉には、数々の実文字アウシザットウが渦巻く水面のように書かれている。ノウアが鍵を差し込むと、実文字アウシザットウに光が走った。上の壁が横に割れ、巨大な目玉が現れる。アトウナは息を呑んだが、叫ぶことはしなかった。たっぷりとした粘膜に覆われた紫の瞳が、こちらをじろっと見つめる。指ほどの太さのまつ毛が、上に四本、下に四本生えている。

一つの目玉に八本まつ毛、魔導師の紋章だ。王家の監視者、八つの仕事人の要。紫の目玉は、やって来たアベドが魔導師であることを認めると、前方を向いて、下の扉を開けた。

アトウナは、ノウアに引っ付いて、中に入った。

「いまのは門番？ ちょっと気味悪くない？」

そう言った彼女はすぐに、師の背中に鼻をぶつけることになった。

ノウアは前方へ光の小鳥を飛ばしていた。小鳥は壁沿いを飛び、硝子玉に光を灯した。永遠とも思われる長い長い通路、両側には、白く塗られた木の扉がぞろりと並んでいる。光の小鳥はそのまま帰って来ず、果ての向こうに消えた。

アトウナは、鳥肌が立った。

「わあ、なんなの、ここ？」

「つながりの扉っていうんだ」

ノウアは歩き出した。「これらの扉の先には、ありとあらゆる世界が続いていてね。その数は、何千万、何千億あるとも言われて―あたしはもつとあると思っっているけれど―とにかく、ここが、アケラスが作って、代々魔導師たちが守ってきた、特別な場所さ」

アートウナは、ずんずん先へいくノウアを追いかけた。白い扉たちはところどころ塗料が剥げていて、丸い金属の取っ手も、長年使われて鈍く光っていた。「じゃあ、これはどこに行くの？」アートウナは、興奮して一つの扉を指した。だが、ノウアは、「あ、あ、あ」と首を横に振った。

「あいにくそれは、開けたときに分かるんだ。前もって知ることはできない」「代々魔導師たちが使ってきたんでしょ？ どの扉がどこへ行くとか、書いてある本があるんじゃないの？」

「待て、待て。いいかい、アートウナ。こんがらがるといけないから、最初に、あたしがここに連れてきたわけを話すから。いいね？」

アートウナは、是非、と、こくこく頷いた。

ノウアは、長くなるから、と言って、地面に胡坐をかき、アートウナにもそうするよう示した。

「〈見えない死〉が広まっているのを知っているだろ。もはや、自然の村の問題だけではなくなっていることも」アートウナが座るなり、師は言った。

「うん。獣の村でも出たとかって、ノウア、この前言ってたね」

「そんな香気に言っている場合じゃないんだよ。……ほれ、これを」

ノウアは懐から巾着を出し、その口をつまむようにしてアートウナに差し出した。

アートウナは、少し身構えた。「何。蛇でも入ってるの？」

「ただの豆だよ。ほら、受け取って」

ノウアは巾着をゆする。アートウナは渋々、両の手で包むように受け取った。とたん、凄まじい悪寒が手から全身へ伝わった。毛虫が這いのぼってくるような痺まじさ。目の前が暗くなり、胸が圧迫され、腹の底から吐き気がこみ上げる。

彼女は悲鳴を上げ、巾着を投げ捨てた。巾着は転がり、中から歌い莢の豆が出てきた。

「燃やして、捨てて！」アトウナは顔を覆い、腕を振った。「早く、早く！もうやめて！」

「これで分かったかね。のうのと過ごしている場合じゃないってことが」

「分かった、分かった、もういい！」

「もう平気だよ」

恐る恐る目を開けると、ノウアが巾着を浮かせ、アウシエスム実言葉を呟いていた。守りを意味する言葉が聞こえる。桃色の光が檻のように巾着を包み、その光が消えた瞬間、周りにとどまっていた容赦ない冷たさと恐怖が、忍び足で去っていった。

アトウナは、知らずのうちに出ていた涙を拭った。手の平が、まだ冷たさでじんじんしている。足も腹も、震えている。

「〈見えない死〉は、馬鹿にならないくらい、あたしたちを負の思いにさせる力を持っている。だから、早急に解呪方法を見つけないといけないんだ。エサルノア女王の言ったとおりにね」

「……ノウアは、それを持っていて何ともないの？」

「いいや。あたしも気分が悪い。正直、守護魔法をかけていてもだよ。……こ

れは早くせいせいえん精製炎で燃やさないとね」

アトウナはその時、ノウアが冷や汗をかいていることに気づいた。

「そんな……。持ってこなくてもよかったのに！」

「持ってこなきゃ、あなた、分かってくれないだろ？」

アトウナは閉口した。

だが、ノウアの目は優しかった。

「あなたには、ここで、あなたにしかできないことをやってもらおうと思ってる。土臭い場所だが、こういう事態なんでね。誰もができることをやっていかない」と

「……何をするの」

ノウアは、巾着を懐にしまいながら頷いた。

「つながりの扉の、番人を探してきてほしいんだ」

「番人？」

「ああ。そいつに、〈見えない死〉に関係する情報をもっていないか、訊ねてほしい」

理解できずに顔をゆがませていると、ノウアは力強く説明した。

「番人は、魔導師のありとあらゆる情報を持っている者だ。先代の魔導師は、魔法の知識や歴史を書物にしてまとめて、魔導師の木の本棚や図書室に残した。だが番人は、それとはまた異なった情報を持っている。それは……、魔導師の記憶、会話だ」

アートウナは、思わずまわりを見渡した。ということは、いままでここで暮らしていた自分は、ずっと盗聴されていたということ？

「いいや、違うよ。番人は、魔導師と対面した時だけのことを保管するのさ。別に、なんでもかんでも見張ってるわけじゃない」

ノウアは手を振った。アートウナは、ほっと胸をなでおろしたが、薄気味悪さは消えなかった。

「番人は、いわゆる、外に出せなかった情報を持っているやつなんだよ」

ノウアは続きを話した。「世の中、なんでもあけっぴろげにしているほど優しくないからね。だから、ここには魔法を使える者しか入れないし、魔導師の

目が扉を守っているし、番人にも簡単には会えないようになってる。もし、愚か者にそういった情報が盗まれたら、大変だからね」

「つまり、番人は秘密をいっぱい持っているってこと？ だから見つけにくくなっているのに、どうやって探せばいいの？」

「うん。ここで最初の質問に戻ってくるわけだな。さっき、なぜ扉を開ける前につながる世界が分からないのか、あんたは聞いただろ？ その説明を、今ここでしなくちゃならん。いいかい、よくくお聞き。」

つながりの扉は、ただいろんな世界につながるわけじゃない。訪れた者の経験を、扉の先に反映させるんだ。だから、常に一定の世界に行けるわけじゃないんだ。……分かるかね」

アートウナは、口を半開きにして眉をひそめた。それを見たノウアは、「あたしがこの説明を受けた時と同じ顔」と言った。

「いいかね。つながりの扉は、開ける者自身に関わる、ありとあらゆるものにつながるんだ。」

例えば、あんたはさつき、ルードルの照り焼きを食ったね？ その時点で、あんたは、そのルードルと関係を持ったことになるんだ。すると扉には、そのルードルに関する世界が加わる。すなわち、そのルードルが生きていたときに使っていた巣や、飛んでいた大空、そのルードルを産んだ親鳥が卵を温めているところ、もしくは、そのルードルを屠殺した獣の人の寝室……といった具合に、扉の先はつながるんだ。

つながるのは過去だけではなくて、いまの状況から起こる可能性の高い、これからのことにもおよぶ。これから見る景色、貰う物、会う者たち、彼らの友達の世界などなど……」

アートウナは、気が遠くなった。つながりの扉というから、他国―アスハリ

エテイク国や、デイゴンネーなどーにつながるんだと思った。だが、自身のつながりから広がる世界だったとは。

ノウアは続ける。

「扉は常に同じところにあるが、その先の世界はそうとは限らない。なぜなら、日々、つながりは更新され、過去のものは薄れていくからね。まあ、強く思っているものは別だが……。だから、仮に一番目の扉を開けてルードルの親鳥を見たとしても、次の日の一番目の扉は、まったく別の世界につながるってしまうんだよ。開ける前に世界が分からないとは、そういうことだ」

「そんな……。でも、それで……。結局、番人は何者なの？」アトウナは混乱して、眉をひきつらせた。「魔導師の記憶や会話を保管しているなら、いままでの魔導師と会ったことがあるってことだから……。魔導師全員と関係があるやつなの？」

「うーん、違うな。番人は、あたしらのつながりとは関係なくて、つながりの扉に住んでいる者と言った方がいいかもしれない。だから番人は、扉の先、どこにでも移動する。見つけるには、ひたすら開け続けるしかないんだ」

アトウナは、唾を飲みこんだ。

「見つけるまでの時間は、開ける者によって異なる。つながりの数は、それぞれ違うからね。開ける者によっては、たくさんつながりの中に埋もれて見つけにくかったりもする。一番いいのは、番人がこちらに興味を持って、自ら進んでやって来ることだ」

「ちよつと待って。つまり、あたしに頼んだのは、あたしの方が、ノウアよりもつながりの数が少ないから？」

「お、ご名答！」

ノウアは、アトウナを指した。

「誰でも、自分のつながりの中から番人を探すのはしんどい。が、七十ちよつとのアベドと、十とちよつとのアベドとじゃ、つながりの規模がぜんぜん違うからね」

アートウナは、片側の扉を先まで眺め、もう片側を、手前に向かって眺めた。そうして、見える限りのすべての扉を眺めた。実際は、それ以上にあるはずだった。

「そいつが、〈見えない死〉のことを知っているわけ？ 歴代の魔導師たちの記憶や会話の中に手がかりがあるだろうって……。ノウアはそう思ってるの？」  
アートウナは、疑心と不安を師に向けた。

「公にされていることがすべてとは限らないからね。ここには臭いことが嫌というほど詰まっているはずだよ。……それに、考えられる可能性は、全部やってみたいからな」ノウアは、並ぶ白い扉を睨みつけた。

二人は、しばらくの間、黙ってそれらを眺めた。

「で、やってくれるかね。番人探しを」ノウアは唐突にアートウナに顔を戻した。「それとも、魔法修行の方がまだましかな？ この前のアウシザットウ実文字試験も、あまりいいできとは言え……」

「ちよつと、ひどい！ それを引っ張ってくるなんて！」

「やるかね、やらないかね」

「やるわ！」

アートウナは言うてから、はつとした。ノウアは勝ち誇ったような笑みを浮かべている。わざと自分で選択させ、逃げ道を失わせる手法に、アートウナはまんまとひっかかった。

「そう言うてくれて助かったよ。じゃ、さっそくやってくれよな」

ノウアはにやにや笑って立ち上がった。

「でもあたし……。もし見つからなかつたら……」

「平気、平気！ きっと気に入るよ」ノウアはさらっと言うと、隠しから鍵を取り出し、弟子に渡した。

それは、翠玉の扉を開けた鍵だった。ずっしりと重く、柄はわずかに手のひらからはみ出る。手に負えるのだろうか、アトウナは自信がなかった。鍵の頭は、縦に長いひし形をしており、つんと顎をあげた女の横顔が中に浮き彫りされていた。

これが番人だろうか。ふと、その涼し気な横顔に闘争心が芽生えた。「私を見つけられるかしら」、そう言っているように見えた。ノウアにのせられるかたちで引き受けたが、たしかに、アウンザットゥ実文字暗記や火あぶりと変わらない魔法修行をするよりはいい。魔法を使わず、ひたすら扉を開ければよいのだから。

「じゃ、よろしく頼んだよ。何か成果が出たら、逐一報告すること」そう言ってノウアは、翠玉の扉から出ていこうとした。

アトウナは、慌てて訊ねた。「ね、番人ってこれ？」彼女は女の横顔をノウアに見せた。

だが、師は肩をすくめた。

「それは、なんとも言えん。だが、すぐにそれと分かるよ」



師がつながりの扉を出て行ったあと、アトウナは一番手前の扉を開けた。

ノウアの前では顔に出さないようにしていたが、アトウナはつながりの扉に

強い興味をもちはじめていた。

（こんな面白いもの、どうして今まで教えてくれなかったんだろう。外に出ることなく、だれにも会わず、いろんな世界を見られる。これって、まさにあたしのための場所じゃん！）

アートウナは、ひそかに喜んだ。

胸を高鳴らせながら初めの扉を覗き込むと、薄暗い褐色の闇が広がっていた。目が慣れるにつれ、両側が背の高い棚に挟まれているのがわかった。発光力の弱くなった石灯が一つ、天井にぶら下がっている。他にも、乾燥させた果物の菓子や飴が、紙に包まれたり、あるいは剥き出しのまま、まるで色づいた雨のように降り注いでいた。

棚に並ぶものも見えてきた。硝子や陶器、木の入れ物がぎっしり詰まっている。『お豆のフーラッカン』『ナルウ苺飴』『陽気な渦巻き』『乾燥黄金の血』『頬笑み砂糖』『芋からり』など、内容物がエイネー文字で書かれていた。

商の人の菓子屋だろう、アートウナは推測した。扉は店の勝手口としてつながったようだ。

だが、店にアベドの気配はなく、物音ひとつしなかった。甘ったるい砂糖の匂いと木の入れ物の香りが混ざりあい、アートウナを手招きする。きっと、飴玉一つ失敬しても気づかれはしないだろう。この扉があれば、万引きだって可能になるのだ。

アートウナは、菓子の宝庫に心揺り動かされたが、まだ現実として受け止めきれなかった。触ればたちまち夢で終わりそうな気がしたのだ。彼女は、それ以上先に入ることはせず、扉を閉めた。

同じ扉を開けるよりも、次の扉を開けることを選んだ。とどまるより、新しい取っ手に触れたかった。

隣の扉をあけた瞬間、あまりの明るさに目を瞬かせた。

正面に大きな窓があり、そこから外の光が入ってきていたのだ。窓枠の上辺は花を模した美しい装飾が彫られている。木彫りの花も、壁紙も、右手にある皺ひとつなく整えられた寝台も、どれも真つ白だった。寝台と窓の間には、仕切りのように本棚が置かれていて、アトウナに側面を見せていた。側面には、海を描いた風景画や、森の中で戯れるアベドの子が描かれた水彩画が、画鋲で留めてある。

個人の部屋だろう、多少の罪悪感を覚えながら、アトウナは部屋の美しさに見とれた。あたしの部屋は、こんなに綺麗なもので溢れていないな。

左の壁に目を向けたとき、彼女は息をのんだ。壁は、一面が棚になっていて、様々な装飾小物がぎっしりと詰まっていた。瓶の中で輝く七色の数珠玉。木皿に盛られた飾り石。かたまって積まれる編み紐に、淡く輝く白い貝殻。ふわりと木箱に入っている飾り房や羽。鎖と金属装飾が隅に掛かり、段々に開いている小さな収納箆筒からは、色とりどりの釦が覗いている。

全体ばかり見ていて気が付かなかったが、アトウナのすぐ横、入口のそばには硝子張りの戸棚があり、ほっそりとした造形的首輪や腕輪、耳飾りなどが並んでいた。使われている宝玉はどれも小さいが、繊細で上品で、無駄のない美しさを放っている。

アトウナの心臓の鼓動は速くなった。先ほどと同じように、ここにもアベドはいないが、もっと知りたい欲求にかられた。窓に面して、奥行のある作業台があり、彼女はそこまで足音を立てずに近づいた。

そこは小さな王国だった。金銀に煌めく金具、どっしりとした接着剤の瓶、様々な表情を見せる鋏、絵筆の軍団が隅で会合を開き、巨大な道具箱がわずかに口を開けて、下に広がる装飾品の下絵に物申そうとしている。

彼女は好奇心を止められなかった。下絵は、どうやら首飾りのための図案のようで、細い線の下書きに、彩色がされていた。赤い雫を金の蔓が絡み、それが鎖へと変化するもので、洗練された曲線はアトウナを釘付けにした。

つくりの人の部屋だとすでにわかっていたが、アトウナはもとの世界に戻ることができなくなっていた。他者の創造、その根源の領域は、あまりにも魅惑的だった。だから、図案の隅に細い文字の走り書きを見つけたとき、肩をたたかれたような衝撃を受けた。彼女は、急いでもとの世界へ駆け込んだ。

泡立つ感情を必死に抑えながら、アトウナは、つなかりの扉の危険性を思い知った。

菓子も首飾りも現実なのだ。二回ともアベドに出会ってはいないが、そこには他者の営みが、たしかに存在した。陽の瞳を取り換えていない石灯、<sup>いしひ</sup>装飾の走り書き、それは本人と向かい合った時よりも、生々しい、存在の温度を運んできたのだった。

次の扉を選んでいる間も、アトウナの心には、どこか糸が引つ張られているような感覚があった。

商の人の店、つくりの人の作業部屋、同じ国だが、まったく異なる世界を見つけた気がした。まるで背中合わせのようだ。彼らは、フーラツカンにカビが生えていないか、珊瑚とアベドの首元の美を最大限に引き出す曲線とはなにか、それを軸とし、日々の回転を生きる。魔法を覚えることや、国の安全を守ること、魔法動物と戦うこと、それらは、回転の中に一切存在しない。それはアトウナにも同じことが言えた。

(それでも……)

脳裏に、図案の走り書きが浮かんだ。

「真っ赤なひとりぼっちの少女は 空高く舞う 鳥を願う」

アートウナは、自分をむき出しにされたような気がした。



次の日。すっかりつながりの扉に取りつかれたアートウナは、『なんもなし部屋』を目指して自室を飛び出した。だが、居間で話すアリアとノウアの声が聞こえると、足を止めた。

「ええ、でも結局、戻ってしまったのよ」

アリアだ。しかし、居間にいたのは、食事台に座る赤紫の猫、シャーナだった。ノウアもおらず、シャーナは、天井の止まり木にいるストロキントと話をしていた。

「やあ、おはよう。……だが、守りの村からは追いだしたんだろう？」

ノウア・ストロキントは、さらりとアートウナに挨拶すると、またアリア・シャーナと話しはじめた。

アリア・シャーナは首を横に振った。

「私は実際、守りの村からは追いだしていないわ。会話を試みようとした途端、

〈グロナーシュ天守り〉は魔法で威嚇して、菓の村へ飛んで行ったのよ」

「恋しくなった、というところか」

「……ええ、そう。昨日確認したら、以前と同じように、マノの〈シラ黄身〉に居

座っていたわ。空は安全じゃないと思っているみたい」

「〈天守り〉の話？」アートルウナは、猫のいる食事台に近づいた。

「ええ、そうよ」

アリア・シャーナは、早口で答えた。いま忙しいんだから、事をあまり知らないあなたは黙って―即答する彼女からは、そんな意味が読み取れた。

「マノの容態はどうだね」

ノウアに訊ねられて、猫は鳥人形に向き直った。

「数日〈天守り〉と離れられて、少しは体力を取り戻したわ。けど、離れた間、彼女、落ち着きがなかったようなのよ。〈天守り〉が〈黄身〉にいた状態に慣れてしまったみたい。だから、今回は憑りつかれたおかげで落ち着きを取り戻してるのよ。……皮肉なことに」

「夜の暴走は？」

「今はないって。でも、肩の痛みがある、と。矢を受けたところと、同じ場所に」

ノウア・ストロキントはしばし沈黙した。アリア・シャーナは続ける。

「薬の人は、痛み止めをマノに飲ませているけれど、一時的なものにすぎない。

元々、傷ついているのは〈天守り〉の方だから……」

「治療させてくれないのかね？〈天守り〉は」

「……。少し私とは、距離を置いた方がいいと思う」紫の猫は目を伏せた。

〈天守り〉は、アリアに―わざとではないにしろ―ぶっ飛ばされて、機嫌を悪くしているに違いない。だから、守りの村でアリアがどうにかしようと思いついた時、自分から逃げていったのだ。アートルウナはそう理解した。

「ならば、あたしが代わりに診るとしよう」ノウアは言った。「アリアは、精製炎の改良を頼む。<sup>ナックイカ</sup>灯火蟬の残りが少なくなっているから、アスハリエイク国に頼まないといけない。改良の際は、術に暴食文字を加えてくれ」

「獣の村の被害が一番重い。それを診てから、術の再編を考えることにするわ」

アリアは、はきはき答えた。彼女は失態を挽回しようと躍起になっていた。

「話は変わるが、アバルバン谷捜査班が二日前に派遣されたそう。班員は、師の人二人に狩りの人二人、道案内に自然の人三人、獣の人の山犬使いが護衛だそうだ」ノウア・ストロキントは翼を羽ばたかせた。

「無事に戻ることを祈るしかないわね。<sup>グロナシユ</sup>〈天守り〉でさえ負傷したのだから」シヤーナは暗く言った。

「彼らは仕事人の精鋭たちだ。彼らが戻らなければ、卑しい潜伏者にはアベドの鉄槌が下されるだろう」

ノウア・ストロキントは肩をいからせた。だが、アリア・シヤーナは返事をしなかった。視点を彷徨わせ、静止している。

「シヤーナ？ ……アリア？」

アートウナが目の前で手を振ると、猫はぶるりと身を震わせた。

「……ごめんなさい。ちょっと、こっちの手が離せなくなって……」彼女は、アートウナの手を見ると、毛を逆立てた。邪魔するな、構うな、無言の圧が発せられる。猫は鳥人形に向かって、「また後で連絡する」というと、首を振った。

「ニヤア」シヤーナは、食事台から飛び降りた。

「ねえ、魔法動物退治は少なくなったんじゃないの？」アートウナは、ふくろうを見上げた。

「どうかな。エストヤーク〈水百足〉も繁殖してるし。エンバーウナ〈夢炎〉が狩りの村でまだ暴れ回っているし。リレンバリグ転がり豚はローセラム〈風草〉に食べられて数を減らしているし。下級魔法動物の仕事が減っても、やることは山のようにある。さあ、あんたも仕事にかかってくれ、アートウナ。事態は一刻を争う」

アートウナが魔法動物の名前に混乱している間に、鳥人形は翼を広げ、居間を出ていった。

アートウナはため息をついた。どこからか、小さな竜の軋んだ叫び声が聞こえる。自室に閉じ込めたエラドルスだ。つながりの扉には連れていけないからだが、後ろ髪引かれる思いだった。一緒にいると悪さをして面倒だが、離れるのも寂しいものだ。とくに一人取り残されたいまの状況では。

「あとで鳥の死体投げして遊ぼう」

自室の扉に向かって、アートウナは言った。彼女はそれから、『なんもなし部屋』へ階段を上がっていった。



つながりの扉に来ると、アートウナは試しに、昨日は菓子屋につながった扉を開けた。だが、ノウアの言った通り、つながりは更新されていた。今日は大空が広がっていて、強烈な高層風にあおられ、アートウナは危うく落ちるところだった。

二番目に開けた扉も、つくりの人の部屋ではなくなっていた。組み合わせさつ

た指のようなでこぼこの土地が、夜闇に広がっている。指の合間にはぼつぼつと小さな光が瞬いていた。誰かが住んでいるのだろうか。村のようだが、アートウナにはどこの村なのか、見当がつかなかった。

その日、彼女は五十ほどの扉を開けた。つながりの扉は終わりがなく、どんなに時間をかけても、すべてを開けきれなかった。

時に、濃霧の世界だったり、朝日が昇る雪山の頂上だったり、傾いた馬小屋や、アートウナの背丈の二倍はある太った青白い虫が、体をぶつけあって争っている世界だったりした。大海で起こった渦潮の真ん前につながったこともある。アートウナは、その迫力に圧倒されて見つめていたが、海面が扉の下まで盛り上がっていることに気づくと、慌てて扉を閉めた。塩辛い水が、足先から額まで濡らした。

なぜその世界につながるのか、アートウナには、まったく理解できなかった。開けば開くほど、混乱した。つながりの扉は、ノウアが言ったルードルの例え話のように、単純なものではなかったのだ。

ある時は、蜘蛛の糸で作られたような、か細くてふわふわ浮いた少女たちが、ずっと食べたり遊んだりしている世界につながった。彼女たちはアートウナと踊りたがったが、アートウナは遠慮した。アートウナは、もしかしたら彼女たちが番人だろうと思い、〈見えない死〉について訊ねたが、彼女たちはずっと笑い続け、ろくに話も聞いてくれなかった。

番人探しは思ったよりも心が折れる仕事だと、アートウナは気づいた。何度も何度も、開けては閉め、開けては閉めの繰り返し。「番人は見れば分かる」とノウアは言ったが、アートウナは見落としているような気がしたし、そう思っても戻れることは不可能で、同じ扉に新たな別の世界が広がった。つながりは、今この瞬間にも更新され、いつときも同じではないのだ。

それに世界は、すべてが感動するような、美しいものではない。

どろどろとした黒い液体が扉をみっちりと塞ぎ、膨らみながら、こちらに来たこともある。得体のしれないたくさん生き物が血を流し、灰に埋まってくる世界もあった。扉を開けた瞬間、七色の閃光が目を貫き、急いで扉を閉めると、爆発の衝撃がこちらに伝わってきたこともあった。首輪をつけられ、金色の爪に追い立てられていく、肉塊の集団も見た。何者かの咆哮と悲鳴が、ずっと続く草原も見た。

アートウナは、何日も何日も扉を開き続けた。そして、挫けそうになる度に、鍵の頭部ですましている女の横顔を見つめた。

「こちらに興味を持てば、向こうからすすんでやって来る」ノウアはそう言っていた。

「あたしが根性なしのつまらないやつだと言いたいわけ？」

アートウナは、親指で女の横顔をこすった。「あんたは理解してないだけだよ。引きずりだしてでもあんたに会ってやる」

アートウナは、次の扉を開けた。無価値だと、決められたくはなかった。